



学校だより 神橋

令和2年10月30日
横浜市立神橋小学校
11月号



憧れの人の言葉

校長 末松 隆一郎

山粧う秋麗のたよりも聞こえてくる頃となりました。冷たい風に翻る桜紅葉(さくらもみじ)の葉の赤い明滅と舞い散る姿に、去り行く季節と深まる季節のうつろさを感じます。

さて、先日の「神橋ふれあい運動会」には、参観の規制やご不便のある中多数ご参観いただきありがとうございました。緊急事態宣言が明けて間もない頃の、マイナスからのスタートでしたが、世を覆う閉塞感残る中で再開した学校での子ども達を見る中で、「目標に向かって、子ども達を輝かせたい」「学校に活気を取り戻したい」、「6年生の子ども達のリーダーとしての思いを形にしてあげたい」・・・、そんな教職員の思いと、6年生を中心とした学校再生への熱意が、見事に具現化した運動会だと自負しています。神橋の子ども達と教職員を誇りに思います。また、そこに至るまでには、保護者の皆様の深いご理解と、体調管理を含めた様々なご協力があったからこそだと、あらためて感謝いたします。ありがとうございました。

「新しい学校生活様式」に則って教育活動を進めていく中では、運動会に限らず、これまでの慣習的な活動を「子ども達の成長」「子ども達のために」の原点から見直し、「コロナ後」を見据えた新しい形を創造していくことが大切であると常々思っています。その中で、私は子どもの頃から憧れている、私の生き方に影響を与えてくれたある人の言葉を思い出します。その言葉は、

「どこにもなかったら、自分で創ったらどうだい？ できるかどうかは、やってみなければわからないじゃないか。」

この言葉は、「ムーミン」というアニメに出てくる「スナフキン」の言葉です。

「ムーミン」 フィンランドの作家「トーベ・ヤンソン」原作の小説と絵本であり、日本では1970年代にテレビアニメ化され、それ以後も「楽しいムーミン一家」(1990～)、「ムーミン谷の仲間たち」(2019年)と放送され、世代を超えた人気を誇る児童文学作品です。私は最初のテレビ放送の時に観ていましたが、ムーミンの親友であり、冬になると南に旅立ち、春にはムーミン谷に帰ってくる、自由と放浪と音楽を愛する吟遊詩人「スナフキン」にとっても憧れていました。



当時は仮面ライダーなど、戦う変身ヒーロー全盛期でした。そんな時代の中で、なぜほのぼのとしたストーリーの一登場人物である「スナフキン」に憧れたのか。やはり「自分もそういう大人になりたい」という思いがあったのだと思います。変身ヒーローのような超人的な強さは持てなくても、スナフキンのような心の強さと優しさ、勇気と頼りがい、人や自然に対する思いやりと知恵をもった大人にはなれるかもしれない、いや、なりたい。そんな思いを「スナフキン」の言葉から感じ取ったからではないかと思えます。他にも多くの名言があります。勿論当時、これらの言葉の意味を理解し噛みしめていた訳ではありません。しかしその言葉を聞き、「人」としてのカッコよさ、憧れを抱いていたのだと思います。

今の状況が完全に収束するまでには、もうしばらく時間がかかるかと思えます。数年後とも言われています。それまでは、子ども達の安全・健康のため、色々な対策、制約があるのは致し方ない事です。しかし、子ども達にとっては、「今」が、かけがえのない「今」だとも思っています。感染対策をしながらも、「今」の学年でしかできないこと、「今」だからできることを子ども達と共に今後も模索し、創っていきたいと思えます。

最後にもう一つ、私の好きなスナフキンの言葉を紹介させていただきます。

「そのうち」なんて当てにならないさ。「今」が、その時さ。